

長野県松本市

MIYAMURAMACHI

松本城下町跡宮村町 第2次

TENJINNISHI

天神西遺跡 第2次

——緊急発掘調査報告書——



2005.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成16年3月1日～3月30日に実施された松本市深志3丁目に所在する松本城下町跡宮村町・天神西遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、大成産業株式会社による共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査であり、同社より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行ったものである。
- 3 本書の執筆は、IV：菊池直哉、V-2：直井雅尚、V-4：内堀 団、その他を竹内靖長が行った。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。

遺物洗浄・注記：百瀬二三子

土器・陶磁器接合：中澤温子

遺物実測：直井雅尚、太田万喜子、竹内直美、曩島菜奈

金属製品整理：内堀 団、洞沢文江

遺構図調整：菊池直哉、松山あずさ

遺構・遺物トレース：松山あずさ

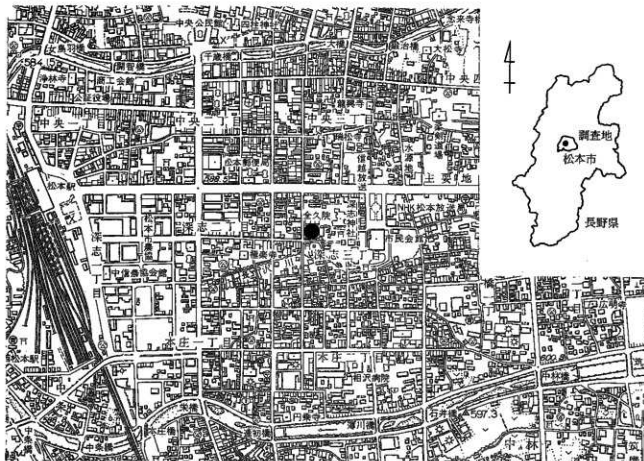
遺物写真：宮嶋洋一

総括・編集：竹内靖長

- 5 本書で使用した略称は以下のとおりである。

竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P

- 6 本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館（〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1 Tel 0263-86-4710 Fax 0263-86-9189）に収蔵されている。



第1図 調査地の位置

● 今回の調査地

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

本遺跡は松本市街地の深志3丁目に位置し、近世の松本城下町(町屋・武家屋敷地)の遺跡として周知されていた。平成11年に第1次発掘調査が行われ、江戸時代の整地層5層を確認し、建物址などの遺構と陶磁器・木製品などの遺物が発見された。さらに、その下層からは古墳時代前期の住居址を確認し、土師器高杯などが出土した。近世城下町の下層で確認された古墳時代の遺跡は、新発見であったため天神西遺跡とした。

今回、当該遺跡内に大成産業株式会社による共同住宅建設事業が計画された(文化財保護法第57条の2に基づく届出書:平成15年2月1日提出)。計画地は第1次調査地を含む場所で、開発内容から埋蔵文化財が破壊されるおそれが生じた。このため、事業者と埋蔵文化財の保護協議を行い、開発事業で埋蔵文化財が破壊される範囲について、発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。発掘調査及びこれに係わる事務処理については、松本市教育委員会が実施することとし、事業者である大成産業株式会社と松本市との間に平成16年2月16日付で発掘調査委託契約が締結された。現地での発掘調査は、平成16年3月1日～3月31日まで実施し、引き続き松本市立考古博物館において整理作業および本報告書の作成を行った。報告書作成に關する委託契約期間は、平成16年4月1日～平成17年3月31日である。

2 調査体制

調査団長:竹淵公章(松本市教育長)

調査担当者:竹内靖長(文化財保護課主任)、菊池直哉(同 嘱託)

調査員:今村克、森義直

協力者:荒井留美子、飯田三男、待井敏夫、道浦久美子、山崎照友

事務局:

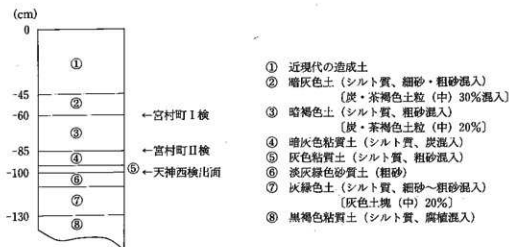
松本市教育委員会教育部文化課(～平成16年6月30日)、文化財保護課(平成16年7月1日～)

有賀一誠(課長 平成16年3月31日)、池田英俊(課長 平成16年4月1日～)、熊谷康治(課長補佐)、

田口博敏(同 平成16年3月31日)、川上百合子(文化財担当係長 平成16年4月1日～)、

直井雅尚(主査)、久保田剛(主任 平成16年3月31日)、小山高志(主事 平成16年4月1日～)、

櫻井了(主事)、渡邊陽子(嘱託)



第2図 基本土層図

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 地形・地質

今回の調査地点は、松本城天守閣の南約1km、標高590m地点に位置する。北には女鳥羽川、南には薄川が流れており、両河川から約500mの地点にあたる。松本市街地周辺では、洪積世後期後半ごろから局部的・構造的な松本盆地の誕生が始まる。このころ西側の城山が傾動しながら隆起をはじめ、それまで大口沢方面に流れていた古女鳥羽川は次第に南西から東へ押しやられ、洪積世末ごろ第三紀層の上に古女鳥羽川の礫層を載せて山地化し、隆起の進行と共に右岸に三段の段丘面を形成しながら市街地東部を流れるにいった。この結果、女鳥羽川は、筑摩山地の三才山峠（1500m）から流れ出し、幾つもの沢と合しながら西に向かって流れ、稲倉から120°向きを変えて市街地に向かって南流し、流路の首振りを繰り返して扇状地を形成した。一方、薄川は市街地の東部三峰山や原峠付近を源流とし、幾つかの沢を合流しつつ入山辺地区の西端付近を扇頂とする扇状地を形成している。この二つの扇状地は、湯川付近で接し、これより南西方向には流路の首振りとともに両者がサンドイッチ状に混成して複合扇状地を形成している。今回の調査地点は、この薄川と女鳥羽川が形成した複合扇状地南端で、東から西へ延びる自然堤防上の舌状台地上に位置している。

調査区北西隅に土層観察用のトレンチを掘削し、土層観察を行った。調査区の基本的な土層構成は、第2図基本土層図のとおりである。第①・②層は、近代～現代の造成土である。近世城下町の整地層は2層捉えられた。第1検出面は第③層の暗褐色土層上面、第2検出面は第④層の暗灰色粘質土層上面である。両層ともに、自然堆積ではなく人為的な盛土層と考えられる。第⑥層は淡灰緑色砂質土で、古墳時代の遺構の掘り込みが確認できた。しかし、古墳時代の遺構の掘り込みが浅いことや、僅かに中世の遺構の掘り込みが残存していたこと、また古墳時代から近世までの堆積土層が確認できないことなどから、城下町造成時に削平されている可能性が考えられる。第⑤・⑥は薄川系の堆積物。第⑦層は黒褐色粘質土で、女鳥羽川系の堆積物である。

2 遺跡周辺の歴史

宮村町は、松本城の城下町として形成された町である。「信府統記」の記述には、もともと戦国期には宮村という集落があり、城下町成立時に宮村町となったとある。ここには、町名の由来となった宮村明神があつたが、飯田城から入封した小笠原秀政が慶長19年（1614）年に、筑摩郡鎌田村（現・松本市鎌田）から天満宮を宮村明神の社地に勧請し、宮村明神と共に松本城の鎮護神とした。また、このとき京都北野天満宮右近馬場に準じて天神馬場を置き、社殿に向かう小路を天神小路とした。小路の北側には、飯田城下から秀政を慕ってきた幸公人（武士）の屋敷地を置いたが、今回の調査地はこの武家地にあたる。「善光寺道名所図会」の「宮村大明神境内」の図をみると、本殿には右側に宮村明神、左側に天満宮が記られている。境内の両側には、万商守護神・恵比寿大黒天・稲荷社・金山権現（鋳物師や鍛冶職人の守神）・病氣治癒の神々など様々な神々が記られていた。秀政以後の歴代城主も社殿の修復、祭礼の費用拠出、警護などを行い、厚く保護している。天保14年（1841）には、両社を合祀して深志神社と名が改められ、現在に至っている。

江戸時代の宮村町は、天神小路から中町までの間に広がっていた南北に長い街で、南側1/3部分が武家地、残りが町人地である。享保8年（1723年）の史料によれば、町人地には51軒の町屋があり、職種をみると桶屋が最も多く12軒確認できる。次いで屋根屋5軒、商人5軒、紺屋4軒、大工、研屋、鞆師、紙屋、鋳造、山伏、棺物屋、医師などの職種がみられる。木工関係を主とした職人が多いのが特徴である。今回の調査地は町の南端の天神小路に近い箇所、武士の屋敷地にあたる。史料では、標高五石二人扶持から八石二人扶持で、城下町南端の警護などにあたっていたようである。

Ⅲ 調査の概要

今回の開発事業地内には、平成11年度に実施した第1次調査箇所も含まれていた。このため、1次調査の結果をふまえ、開発行為で遺跡が破壊されるおそれのある範囲を調査区として設定した。調査は、まず重機により確認トレンチを掘削し、土層観察を行った。この結果、近世の遺構検出面2面と古墳時代の検出面1面を確認したため、上層から順次的に調査を実施していくことにした。まず、第I検出面までの表土除去を行ったあと、人力により遺構検出作業・遺構掘り下げ作業を行った。遺構の測量は、任意の3m方眼を設定し、後に基本点に国家座標を移設した(各面共通座標)。第II・第III検出面(天神西遺跡)は、上層の調査が終了するたびに重機で掘削し、各面の調査を実施した。遺構番号は、各面ごとに1から付した。

調査の結果、第I・II検出面では近世後半～近代の土坑・ピット・溝、第III検出面(天神西遺跡)では古墳時代の住居址・土坑・ピット・溝が確認された。第I・II検出面で発見された土坑は、大半が廃棄土坑で遺構間の重複が著しい。第III検出面で発見された古墳時代の遺構は、1次調査でも住居址1軒が発見されており、周辺に集落址が広がっている可能性が高い。地形上の特徴をみると、東から西へ舌状台地が延びており、古墳時代の集落もこの台地上に展開しているものと考えられる。試掘トレンチの土層観察では、古墳時代の検出面より下層には黒褐色粘質土(腐植物多量に混入)や砂質土が互層的になっており、低湿地帯で河川の影響を大きく受けた場所であったことがわかった。下層では遺構・遺物ともに発見されなかったことから、本調査地点周辺では古墳時代に河川の影響を受けにくい比較的安定した場所となり、集落が展開したのと考えられる。1次調査および今回の調査の各面で確認された遺構・遺物は下記のとおりである。

今回の調査(第2次調査)

調査期間：平成16年3月1日～3月30日

調査面積：第I検出面85.7㎡ 第II検出面83.4㎡ 第III検出面(天神西遺跡)88.3㎡
(I～III検合計：257.4㎡)

検出遺構：第I検出面…土坑40、ピット9、溝2

第II検出面…土坑31、ピット4、溝5

第III検出面(天神西遺跡)…住居址1、土坑2、ピット13、溝1

出土遺物：〈江戸時代〉陶磁器(瀬戸美濃産、肥前産、京・信楽産ほか)、土器(在地産)、瓦質土器、木製品(下駄、曲物、柄杓、漆箱類、漆椀蓋、扇子、篋など)鉄製品(釘、銭貨など)

〈古墳時代〉土器(壺・甕・高杯・小型器台・鉢)

第1次調査

調査期間：A地区(平成11年7月12日～7月16日)

B地区(平成11年12月7日～12月11日)

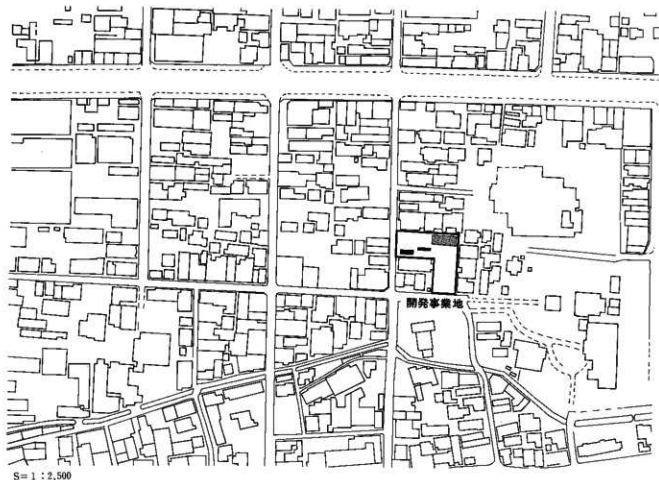
調査面積：A地区18㎡、B地区19㎡

検出遺構：〈江戸時代〉建物址1、土坑2、杭列1、石組1、井戸1

〈古墳時代〉竪穴住居址1

出土遺物：〈江戸時代〉陶磁器(瀬戸美濃産、肥前産、京・信楽産など)、木製品(漆椀)、金属製品(寛永通宝)

〈古墳時代〉土器(高杯・甕・壺)

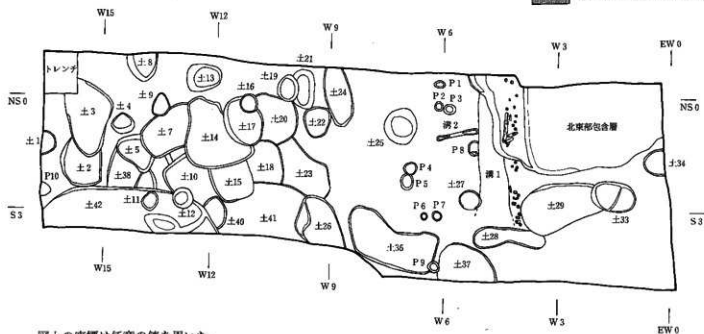


第3図 調査範囲図

宮村町I棟

■ 第1次調査箇所

■ 今回調査(第2次)箇所



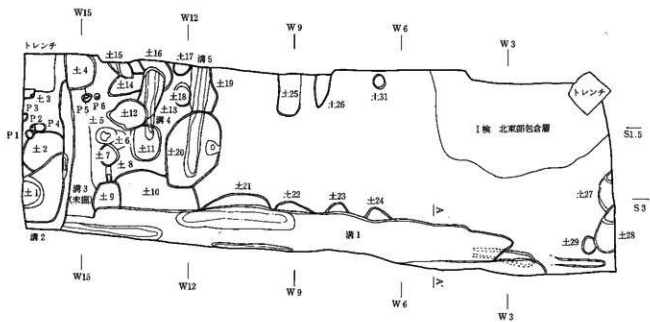
図上の座標は任意の値を用いた。

(NS0 EW0)が国家座標の(X=2532.475 Y=-47102.088 8系)

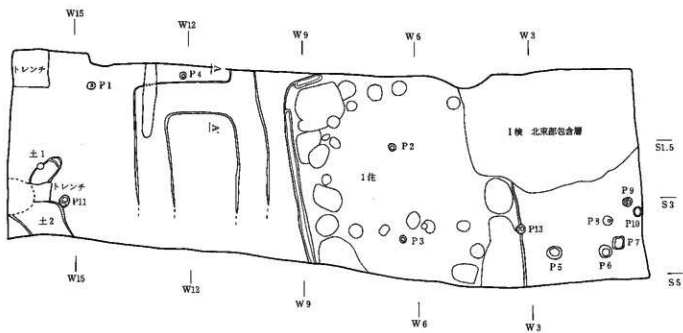
真北は図上の北からN-1°57'40"-E

第4図 遺構全体図(1)

富村町II棟



天神西



第5図 遺構全体図(2)

IV 遺構

1 宮村町第Ⅰ検出面

土坑40基・ピット9基・溝2条を検出した。調査区の西半は土坑が集中しており、切り合いが著しかった。これらの土坑は覆土に陶磁器片・木器片等の遺物や、木片・炭化物を含んだものが多数見られた。この土坑の集中した範囲の東側に隣接して、東西幅4m程の遺構が希薄な範囲があった。さらにその東側から調査区東端までは再び土坑が集中したが、一部は遺構の切り合いが著しいことに加え地下水位が高く検出が困難であったため、北東部包含層として一括して取り扱った。以下では遺物の出土した遺構を中心に概観する。

土坑2

調査区西側の土坑集中範囲に位置し、土3と土42に両端を切られる。覆土は4層からなり、最下層には木片と炭化物が含まれた。遺物は覆土中および底部付近から少量出土した。

土坑3

調査区西側の土坑集中範囲に位置する。覆土は4層からなり、下層には大小の木片と炭化物が多く含まれた。遺物は覆土中および覆土表面付近から非常に多くの陶器片が出土した。

土坑5

調査区西側の土坑集中範囲に位置し、土7に切られる。覆土は2層からなり、木片と炭化物が含まれた。遺物は覆土中から少量出土した。

土坑7

調査区西側の土坑集中範囲に位置し、土9と土14に切られる。覆土は2層からなり、木片と炭化物が少量含まれた。遺物は覆土中の比較的浅い位置から出土しており、数点の陶器のほか木器も確認された。

土坑8

調査区西側の土坑集中範囲に位置する。覆土は単層で大小の木片と炭化物が多量含まれた。遺物は比較的多く出土したが、小片が多く図化できる個体は無かった。

土坑13

調査区西側の土坑集中範囲に位置する。覆土は単層で、大小の木片と炭化物が多く含まれた。遺物は覆土中から木器の筥が出土した。

土坑14

調査区西側の土坑集中範囲に位置し、土17に切られる。覆土は3層からなり、主体となるII層には木片が多く含まれた。遺物は覆土中から出土しており、磁器のほか木器も多く出土した。

土坑15

調査区西側の土坑集中範囲に位置し、土14に切られる。遺物は覆土中から、陶磁器が少量（未図化）出土したほか、木器が1点出土した。

土坑19

調査区西側の土坑集中範囲に位置する。覆土は単層で、木片が非常に多く含まれた。遺物は覆土中から木器（下駄）が多量出土した。遺物の出土状況は別図で示した。

土坑21

調査区西側の土坑集中範囲に位置する。覆土は2層からなり、上層には小礫が少量、下層には木片が多量含まれた。遺物は出土したものの、小片で図化できる個体は無かった。

土坑28

調査区東側に位置する。覆土は単層で、覆土中に多くの礫が含まれた。覆土中に礫を含む遺構はほかに土21と土28に近接する溝1のみである。遺物は出土しなかった。

溝 1

調査区東側に位置し、東側を北東包含層に切られる。主軸方向はN-2°-Wである。土層は単層で礫を少量含んでおり、断面形は緩いV字形であった。遺物は少量出土したのみで、図化できる個体は無かった。調査区中央付近の空閑地と北東包含層とを仕切る位置にあるが、用途等は不明である。東側に平行した杭列があるが、北東部包含層よりも上面から打ち込まれており、溝1と直接関係する遺構ではないと考えられる。

北東部包含層

調査区の北東隅に位置している。覆土は8層からなり、覆土中には多くの遺物・木片が含まれた。複数の遺構が切り合っていると考えられるが、土層断面からも遺構を判別するのは困難であった。遺物は陶磁器が多量出土したほか、木器も1点見られた。出土した陶磁器にはやや時期幅があるが、概ねI検の時期内に収まっている。

2 宮村町第II検出面

土坑31基・ピット4基・溝5条を検出した。遺構は調査区の西側1/3程の範囲に集中しており、切り合いが著しい。他の範囲は遺構が非常に希薄であった。遺構は全般に浅く、遺物の出土量は極めて少なかった。以下では遺物の出土した遺構を中心に概観する。

土坑 1

調査区西側の土坑集中範囲内に位置し、溝2に切られる。覆土には陶磁器等の小片のほか、大小の木片が非常に多く含まれた。遺物には遺構壁面付近から陶器の碗が1点出土した。

土坑 4

調査区西側の土坑集中範囲内に位置する。覆土は2層からなり、下層には炭化物と木片が少量含まれた。遺物は覆土中から少量出土した。

溝 1

調査区南側で東西方向に延びており、屋敷境を意識した溝の可能性がある。覆土は3層からなるが、連続的な堆積ではなく切り合い関係がみられることから、同一遺構内で時期的な差が有るものと考えられる。また底面も土層に対応するとみられる凹凸が主軸方向に続いている。遺物は覆土中からやや多く出土したが小片が多く、図化できたのは在地産の土器の皿(近世)1点のみである。また中世に属するとみられる陶器(未図化)も数点出土したが、混入と考える。

溝 2

調査区の西隅に位置する。平面形は調査区内ではJ字形に捉えたが、南側と西側は調査区外に続いており詳細は不明である。遺構に付随すると見られる杭列と小ピット群が南北方向に続いており、遺構本体を含め用途は不明である。遺物は出土しなかった。

3 天神西遺跡(第III検出面)

住居址1軒・土坑2基・ピット13基・溝1条を検出した。住居址は調査区中央のやや東寄りに位置し、ピットは住居址の南東側に集中していた。以下では遺物が出土した遺構を中心に概観する。

第1号住居址

東壁の一部はI検の溝1に切れ、南北は調査区外に続いている。平面形は、北西隅のみが確認できており、方形ないし長方形と推定される。残存値で南北方向が5.42m、東西方向が5.68mで、床面積が26.37㎡である。軸方向は西壁でN-8°-Wである。覆土は8層からなり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東の床面に薄く灰・炭の混じる範囲を2ヶ所確認したものの、焼土は確認されず炉とは判断できなかった。床面に26基のピットを確認したが柱穴は判然としなかった。その他の施設では西壁沿いと北西隅付近に周溝を確認した。遺物は、大半が覆土中から出土した。

土坑 2

調査区南西隅に位置し、一部はII検の土1に切られ、南側は調査区外に続いている。土層は2層からなる。遺物は覆土中から比較的多く出土した。

ビット

調査区南東のビット群は断面の観察から、その多くが柱穴であったと推測されるが、全容は不明である。遺物は古墳時代とみられる土師器片が覆土中からそれぞれ少量出土したが、図化できたものはP10から出土した1点のみであった。

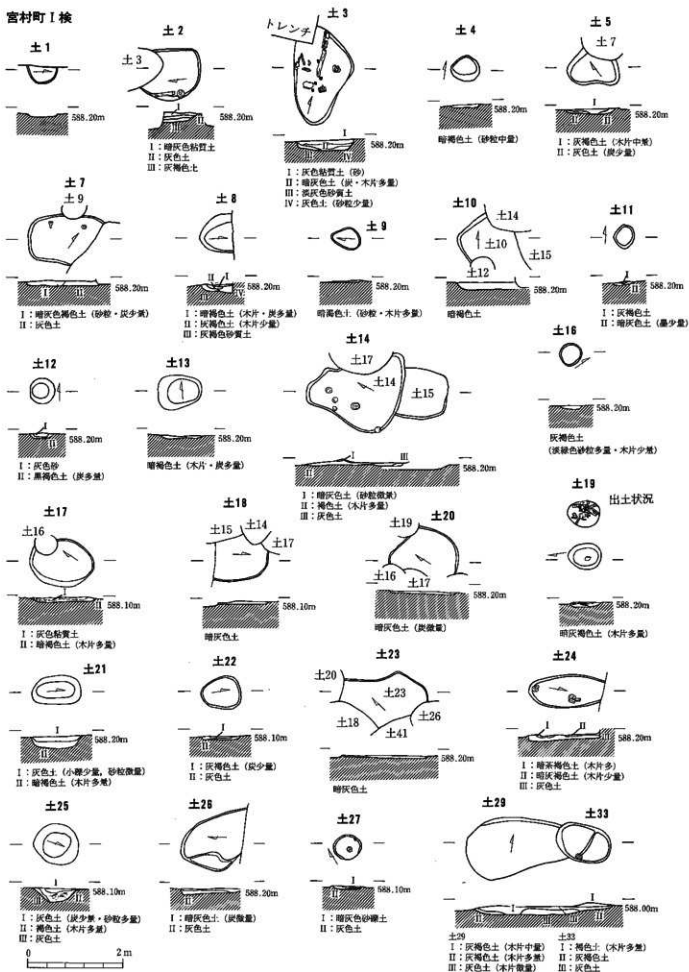
第1表 宮村町・天神西土坑・ビット一覧表

検出層	検出位置	形状	長さ	幅	厚さ	備考
I	土1	不明	66	42	6	
I	土2	楕円形	(140)	108	20	土3・土42に切られる
I	土3	楕円形	208	128	20	土2を切る
I	土4	楕円形	60	54	6	
I	土5	楕円形	108	(106)	12	
I	土7	楕円形	168	102	12	土5・土38を切る 土9・土14に切られる
I	土8	楕円形	82	70	18	
I	土9	楕円形	34	45	4	土7を切る
I	土10	楕円形	(172)	(112)	4	土38・土39を切る 土12・土14・土15・土41に切られる
I	土11	楕円形	52	44	4	土42を切る
I	土12	円形	54	52	12	土10・土38・土42を切る
I	土13	楕円形	96	72	8	
I	土14	楕円形	222	154	12	土7・土10・土15・土17・土18を切る
I	土15	楕円形	(132)	106	8	土10・土18・土41を切る 土14に切られる
I	土16	楕円形	48	48	8	土17・土20を切る
I	土17	楕円形	120	(76)	9	土18・土20を切る 土14に切られる
I	土18	不明	(128)	(116)	8	土20・土23を切る 土14・土15・土17・土41に切られる
I	土19	楕円形	70	56	10	土20・土21を切る
I	土20	不明	(148)	(128)	6	土19を切る 土16・土17・土18に切られる
I	土21	楕円形	104	60	26	土19に切られる
I	土22	楕円形	84	70	9	土24に切られる
I	土23	不整形	(186)	128	6	土18・土20・土26・土41に切られる
I	土24	楕円形	(158)	70	10	土22を切る
I	土25	楕円形	96	96	30	
I	土26	楕円形	(170)	120	12	土23・土41を切る
I	土27	円形	60	52	6	溝1を切る
I	土28	不明	188	56	9	溝1を切る
I	土29	不明	(204)	130	20	土28を切る 土33に切られる
I	土33	楕円形	100	58	16	土29を切る
I	土34	不明	56	(52)	18	
I	土36	不整形	(260)	122	8	P9を切る
I	土37	不明	147	100	5	P9に切られる
I	土38	不明	(120)	(96)	8	土5・土7・土10・土12・土39・土42に切られる
I	土39	不明	(62)	(64)	12	
I	土40	不明	(86)	(50)	4	土41を切る 土42に切られる
I	土41	不明	(258)	(146)	5	土18・土23を切る 土15・土26・土40に切られる
I	土42	不明	(436)	(106)	22	土2・土38・土39・土40を切る 土11・土12に切られる
I	P1	楕円形	30	18	6	
I	P2	円形	26	24	5	
I	P3	楕円形	32	26	17	
I	P4	円形	36	34	12	P5に切られる
I	P5	楕円形	43	32	13	P4を切る
I	P6	円形	20	18	15	
I	P7	円形	26	27	7	
I	P8	楕円形	39	(30)	6	溝1に切られる
I	P9	円形	32	28	7	土36・土37を切る
II	土1	不明	(216)	104	32	土2を切る 溝2に切られる
II	土2	楕円形	(134)	108	6	土1・溝2・P1・P4に切られる
II	土3	不明	40	26	10	
II	土4	不明	(114)	86	12	溝2・溝3を切る
II	土5	楕円形	56	46	12	土6・土7を切る
II	土1	不明	(216)	104	32	土2を切る 溝2に切られる
II	土2	不明	(134)	108	6	土1・P1・P4・溝2に切られる
II	土3	不明	40	26	10	
II	土4	不明	(114)	86	12	溝2・溝3を切る
II	土5	楕円形	56	46	12	土6・土7を切る

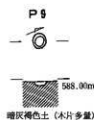
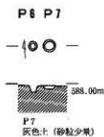
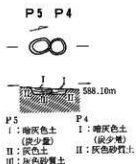
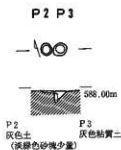
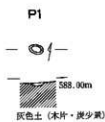
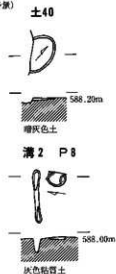
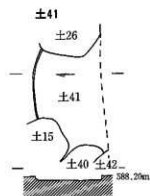
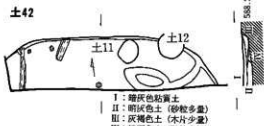
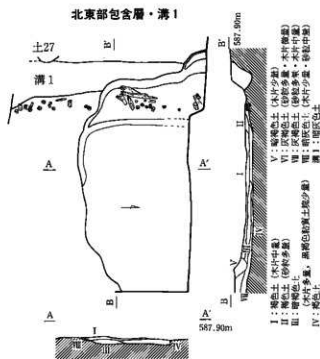
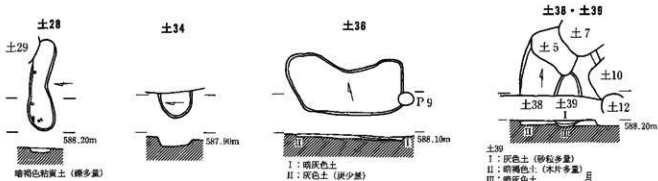
II	±6	横円形	(48)	(48)	6	±5・±7に切られる
II	±7	不整形	(66)	58	6	±6・±8を切る ±5に切られる
II	±8	不明	(44)	14	13	±7・±9に切られる
II	±9	横円形	(100)	76	8	±8・±10を切る 溝1に切られる
II	±10	不明	(256)	(108)	6	±9・±20・溝1に切られる
II	±11	横円形	(104)	88	12	溝4を切る ±12に切られる
II	±12	不整形	116	84	4	±11・±13・溝4を切る
II	±13	横円形	(148)	84	14	±14・±16・溝4を切る ±12に切られる
II	±14	不明	(114)	(54)	4	±13・±16を切る
II	±15	不明	(84)	(44)	8	±14を切る
II	±16	不明	(104)	(82)	4	±13に切られる
II	±17	不明	(50)	(34)	20	
II	±18	横円形	68	48	7	±19を切る
II	±19	不明	(144)	(74)	12	溝5を切る ±18・±20に切られる
II	±20	横円形	232	154	12	±10・±19・溝5を切る
II	±21	不明	(196)	(32)	8	溝1に切られる
II	±22	不明	(110)	(28)	8	溝1に切られる
II	±23	不明	(62)	(26)	4	溝1に切られる
II	±24	不明	(76)	(36)	5	溝1に切られる
II	±25	不明	(116)	44	6	
II	±26	不明	(92)	46	4	
II	±27	不明	(124)	(46)	8	±28に切られる
II	±28	不明	(140)	(60)	10	±27・±29を切る
II	±29	不明	(46)	48	8	±28に切られる
II	±30	横円形	(186)	46	24	溝1を切る
II	±31	円形	40	36	14	
II	P1	円形	26	22	6	±2を切る
II	P2	円形	16	12	12	P4を切る
II	P3	不明	24	22	6	
II	P4	不明	(46)	32	6	±2を切る P2に切られる
天	±1	不明	(104)	48	15	
天	±2	不明	(168)	86	14	
天	P1	円形	20	20	12	
天	P2	円形	16	16	16	
天	P3	円形	20	18	6	
天	P4	円形	18	16	6	
天	P5	横円形	40	32	6	
天	P6	円形	38	32	31	
天	P7	隅丸方形	32	30	34	
天	P8	円形	26	24	24	
天	P9	円形	26	24	22	
天	P10	円形	26	26	20	
天	P11	円形	32	26	20	
天	P12	円形	28	22	26	
天	P13	円形	24	20	28	1柱を切る

長軸・短軸の()内の値は残存値
 1横±6・±30～32・±35は欠番
 天：天神西

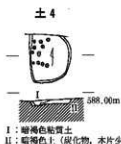
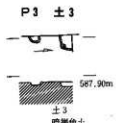
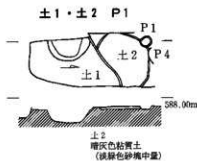
宮村町I検



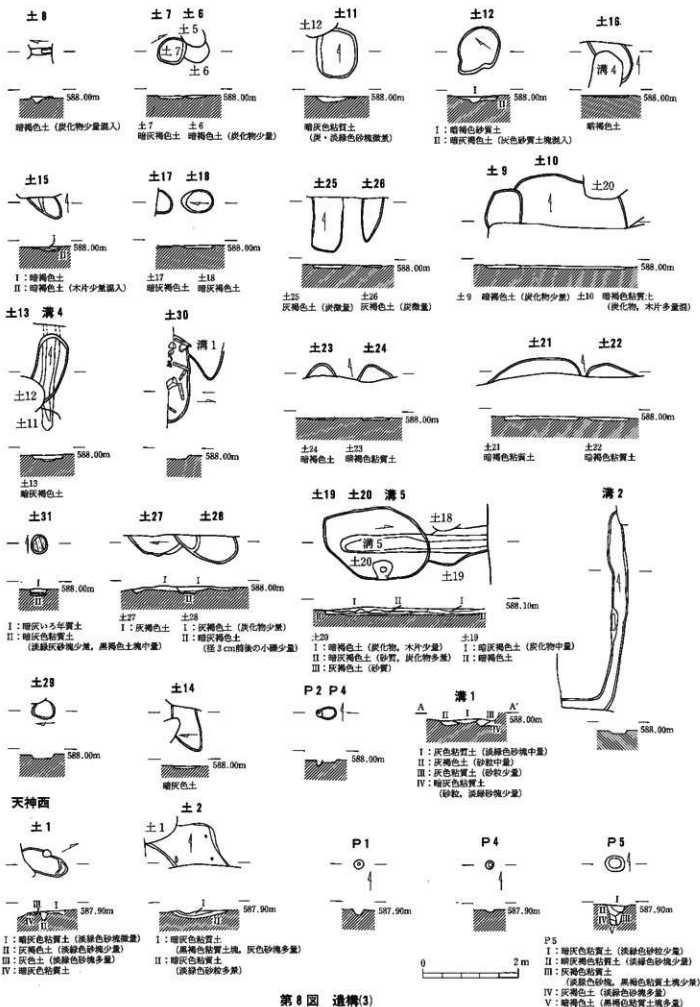
第6図 遺構(1)



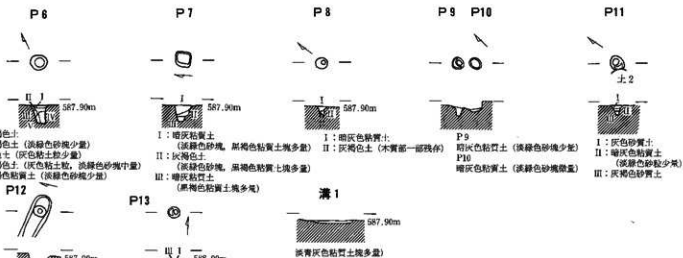
宮村町II棟



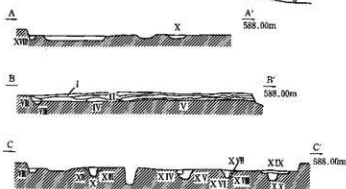
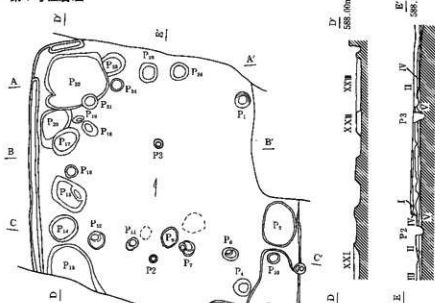
第7圖 遺構(2)



第 8 図 遺構(3)

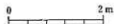


第1号住居址



○ 灰範圍

- I住
- I: 褐色土 (灰色土粒中量)
 - II: 暗灰色土 (青灰色砂塊少量)
 - III: 灰褐色土 (青灰色砂塊多量)
 - IV: 青灰色砂質土 (暗灰色土塊散量)
 - V: 青灰色土 (砂粒多量, 暗灰色土粒中量)
 - VI: 暗灰褐色土 (青灰色砂塊少量)
 - VII: 暗灰色粘質土 (青灰色砂塊少量)
 - VIII: 暗灰色砂質土 (暗灰色粘質土塊中量, 層積覆土)
 - IX: 暗綠灰色砂質土 (暗灰色粘土塊中量)
 - X: 暗綠灰色砂質土 (暗灰色粘質土塊多量)
 - XI: 暗灰色粘質土 (淡綠色砂塊中量)
 - XII: 灰褐色土 (淡綠色砂塊中量)
 - XIII: 暗灰色粘質土 (暗灰色粘土塊中量)
 - XIV: 暗灰色粘質土 (淡綠色砂質土塊多量)
 - XV: 暗褐色粘質土 (淡綠色砂質土塊多量)
 - XVI: 暗褐色粘質土
 - XVII: 暗灰色土 (淡綠色砂塊多量)
 - XVIII: 暗灰色土 (淡綠色砂塊中量, 暗褐色粘土塊少量)
 - XIX: 暗綠灰色砂質土 (暗灰色粘質土塊中量)
 - XX: 暗灰色粘質土 (暗灰色砂質土塊中量)
 - XXI: 暗綠灰色砂質土 (暗褐色粘土塊多量)
 - XXII: 暗綠灰色粘質土 (暗褐色粘土塊多量)
 - XXIII: 暗綠灰色砂質土 (暗灰色粘土塊中量)
 - XXIV: 暗綠灰色粘質土 (暗褐色粘土塊中量)
 - XXV: 暗灰色粘質土
 - XXVI: 暗褐色粘質土
 - XXVII: 暗褐色粘質土
 - XXVIII: 暗褐色粘質土
 - XXIX: 暗褐色粘質土
 - XXX: 暗褐色粘質土
 - XXXI: 暗褐色粘質土



第9圖 遺構(4)

V 遺物

1 宮村町出土土器・陶磁器 (第2表、第10~14図)

宮村町の調査では、23,120gの土器・陶磁器が出土した。内訳は、宮村町第Ⅰ検出面19,610g、第Ⅱ検出面3,510gである。これらのうち、図化可能な96点を実測し提示した。種別では、陶器・磁器・土器がみられ、器形は多岐にわたる。以下、各検出面ごとに器種・器形およびその器種構成について記述する。

(1) 第Ⅰ検出面出土土器・陶磁器群 (第10図1~第13図70)

Ⅰ検では、70点を図化した。種別は、土器5点(7.1%)・陶器30点(42.9%)・磁器35点(50.0%)で、磁器が最も多い。

ア. 磁器

肥前産製品に加えて瀬戸美濃産製品がみられる。生産地における製作年代観では、19世紀代の資料が主体となり、18世紀後半代のものが若干みられる。産地別の器種構成は、肥前産15点(器種:碗・小碗・皿・蕎麦猪口)、瀬戸美濃産12点(器種:碗・小碗・小杯・角皿・蕎麦猪口・鉢・急須)産地不明1点である。

次に、器種別の様相をみてみたい。碗は、4・19・29・35・50・61・69が肥前産、3・11・20・28・54が瀬戸産である。3は、瀬戸美濃産染付碗である。外面には草花文、口縁内面には四方禪文、見込部に松竹梅文が描かれている。4は肥前産染付碗で、口縁内面には四方禪文、見込み部に昆虫文が描かれている。11は瀬戸美濃産製品で、外面から口縁内面まで鉄軸、内面見込みに七宝繁文が描かれている。20は、コバルト具須で文様が描かれている瀬戸美濃産製品で、19世紀後半代のものである。61は、18c末~19c初めの肥前産広東碗である。内面見込部には花文、外面には山水文が描かれている。碗蓋は13・16の2点のみ。13は肥前産碗蓋である。外面には松・草花文、内面は口縁部に四方禪文、天井部に松竹梅繁文が描かれている。16は瀬戸美濃産蓋である。外面に撫子文、口縁内面には四方禪文がみられる。皿は、肥前産は4点(2・55・62・66)、瀬戸美濃産2点(15・39)の計6点出土した。2は、口縁部内面には草花文、見込部にコンニャク判による五弁花文がみられる。口縁外面には唐草文、底裏には渦福文がみられる。18c初頭の肥前産と考えられる。15は、コバルト具須の瀬戸美濃産染付皿である。捻子花区画に草花文が描かれている。39は型打の角皿である。内面に陽刻で記繁文が施されている。55は、蛇ノ目凹形高台の肥前産皿である。焼継痕があり、裏面には焼継ぎ白玉により文字が書かれている。62は、口縁内面は墨弾きによる草花文様、外面は唐草文が描かれている。66は、内面に竹文、見込部に五弁花コンニャク判、外面には唐草文が描かれている。蕎麦猪口は2点(30・65)あるが、双方ともに肥前産である。30は外面に人物・舟が描かれており、底裏には「大明年製」銘がみられる。

イ. 陶器

Ⅰ検で出土した陶器は26点みられる。これらの産地別内訳は、瀬戸美濃産22点(84.6%)、京・信楽産2点(7.6%)、万古産1点(3.9%)、肥前産1点(3.9%)で、大半が瀬戸美濃産で占められる。器種は、碗類(碗・鍔茶碗・拳骨茶碗・小杯)、鉢類(捏鉢・片口鉢)、灯明受皿、御神酒徳利、仏飯具、餌猪口、急須蓋、蓋、摺鉢がみられる。32・47は瀬戸美濃産鍔茶碗である。外面には、口縁から高台まで施文具による鑑手文が施されている。口縁端部から内面には、鉄軸が掛けられている。64は、瀬戸美濃産拳骨茶碗の底部である。9は、京・信楽系の色絵碗である。体部外面には色絵で草木文が描かれ、高台周辺は露胎である。59は、瀬戸美濃産小杯である。底部高台周辺は露胎であるが、体部内外面には灰軸が施されている。灯明受皿は、6・22・24・42・53の5点が出土した。すべて瀬戸美濃産で、6・22・42は銅軸、24・53は灰軸製品である。油口部分は、穿孔されるもの(42)と、切り込みが入れられているもの(22・53)がある。

ウ. 土器

土師器皿3点(40・58・67)、火鉢(44)、植木鉢(63)が出土した。土師器皿はすべてロクロ成形で、底

部には回転糸切痕が残る。また、これらの3点の口縁端部には、煤が付着していることから、灯明皿として使用されたものと考えられる。

(2) 第II検出面出土土器・陶磁器群 (第13図71～第14図96)

II検では26点を図化した。種別内訳は、土器5点(19.2%)・陶器14点(53.9%)・磁器7点(26.9%)で陶器が最も多い。生産地は、陶器は瀬戸美濃産と京・信楽産、磁器は肥前産、土器は在地産がみられる。

ア 磁器

碗は、肥前産が主体である。72は広東碗、73は矢羽根文が描かれた碗である。78は底部が厚く、見込み部に五弁花文がみられる。II検出土磁器の帰属磁器は、いずれも18c後半～19c前半のものである。

イ 陶器

81・82・83は、京・信楽産の色絵製品である。外面に銅緑釉・鉄釉・赤絵で草文が描かれている。82は筒型の碗、81・83は丸碗である。88・94は、瀬戸美濃産の碗である。88は体部内外面に灰釉が施軸され、底部高台部分が露胎である。94は、高台内まで灰釉が施軸されているものである。90は、瀬戸美濃産の小型の御神酒徳利である。89は、灰釉が施軸された京・信楽産の灯明皿である。

ウ 土器

土器器皿が5点(85～87・95・96)出土している。いずれも器高は1.9～2.6cmと低く、口唇部が厚くなるもの(85・87・95)と、薄く立ち上がるもの(86・96)の2種に分けられる。

2 天神西出土土器 (第3表、第14図97～113)

壑穴住居址(1住)、土坑、ピット及び検出面から土器器が出土している。いずれも古墳時代前期に属すると考えられるもので、総重量は2,840gになる。図化提示できたもの17点を中心に器種・器形ごとに概観する。

壺 口縁部5点(99～101・111・113)、底部2点(104・112)を図化できた。99・101は単純に外開する単口縁、100は口縁端部が厚く折り返され外向きの面をつくるもので、端部下面には指頭圧痕を顕著に残す。111は口縁端部が小さく折り返される小破片で、鉢の可能性もある。113は二重口縁の上半部で、口唇にハケメ工具で線条痕とともに列点刺突が施紋される。102は高杯(小型器台)の脚部として図化したが、直口縁壺である可能性も残る。

甕 口縁胴部2点(97・98)、底部2点(107・108)を図化できた。97・98はいずれも薄手で堅緻な焼成と灰褐色系の胎土を有する特徴的な個体で、細かいハケメが付される。図化できなかつたが同様の破片が数点ある。107はこれらの底部と推定される。

高杯 杯部1点(109)、脚部1点(110)を提示した。その他、106が杯部、102・103が脚部の可能性がある。110は柱状の上半部から端部が急激に外開し、小形高杯の脚部と考えられる。

小型器台 器受け部1点(105)を図示した。102・103の2点は脚部の可能性がある。105の器受け部は端部外面に強いヨコナデで凹線による稜を作り出している。

鉢 106の1点を鉢と考えたが、前述のとおり高杯の杯部の可能性もある。細かいハケメ状の調整痕が内外面に残り、ミガキは窺えない。

今回の土器群の全体的な特徴としては、97・98の甕に代表される灰褐色系で薄手の胎土を持つ個体と、在地でよく見かける黄褐色系の胎土の個体が混在している点と、壺・高杯・小型器台類の器面調整でミガキが不明瞭な個体が多かった点である。松本市内においても湧水に近い低地に立地する集落の土器内容の一端が把握できたものと評価されよう。

第2表 宮村町土器・陶磁器観察表

図No 別表7	出土地点	注記	種類	器形	寸法(Cm)			残存度	胎土	技法・文様・形の特徴	輪調	推定年代	推定産地	
					口径	底径	高さ							
1	I棟・北東隅 包含層	I棟-008	磁器	小杯	(5.8)	2.6	3.8	1:1/7/8、底:完	白	無文	透明	19c後半	瀬戸美濃	
2	I棟・南1	I棟-001	磁器	皿	(3.6)	(6.8)	3.7	1:1/1/2、底:1/12	灰白	内面:草花文・二重圓縁・見込み部五弁花コンキョウ判、外 面:唐草文、底裏:唐草文	透明	18c初	肥前	
3	I棟・検出面	I棟-011	磁器	碗	10.3	3.7	3.4	完形	白	外周:草木文、内面:口縁部に四方文、見込み部に唐杖状 竹文と唐縁1条	透明	19c後半	瀬戸美濃	
4	I棟・検出面	I棟-013	磁器	鉢	(9.9)	(3.5)	5.6	□:1/2、底:1/2	白	口縁1条、唐縁あり	透明	19c後半	肥前	
5	I棟・検出面	I棟-008	磁器	鉢	—	(8.5)	—	□:欠、底:1/3	白	外周:草花文、底面:蛇目彫彫台、内面:見込み部花文の 胴部へ底面回転ヘラズリ、内面コナデ	透明	19c後半	肥前	
6	I棟・検出面	I棟-011	磁器	鉢	鮮明受皿	(9.9)	5.4	2.1	□:1/2、底:完	乳白	口縁部へ底面回転ヘラズリ、内面コナデ	鉄輪	19c前半	瀬戸美濃
7	I棟・検出面	I棟-011	磁器	脚神酒後利	—	3.5	—	□:欠、底:完	白	口縁上縁付、唐縁・底・唐縁・樹文の文様	透明・赤鉄	19c後半	不明	
8	I棟・検出面	I棟-011	磁器	鉢	(9.6)	3.9	3.5	□:1/3、底:完	白	外周:唐草文、赤鉄上縁付(南文)、唐縁あり 胴部裏割、外周:花本文、内面:見込み部に草花文	透明・赤鉄	18c後半	肥前	
9	I棟・北東隅 包含層	I棟-009	陶器	碗	(8.8)	2.8	5.3	□:3/5、底:2/3	淡黄白	—	灰輪	18c後半~19c初	京・信濃	
10	I棟・検出面	I棟-012	陶器	鉢	(8.9)	3.7	6.1	□:1/16、底:ほぼ完	淡黄白	—	透明	18c前半	瀬戸美濃	
11	I棟・検出面	I棟-012	磁器	鉢	(10.3)	4.4	(5.7)	□:1/8、底:完	白	内面口縁部、外周:文様不明、内面:見込み部五弁花、二重圓縁 外周一口縁内面鉄輪、体部内面中位に二重圓縁、見込み部に七 宝文	透明・鉄輪	19c	瀬戸美濃	
12	I棟・検出面	I棟-013	陶器	宋碗	(4.2)	3.6	4.8	□:1/2、底:完	乳白	武藏圓転赤切城・径3mm小孔あり	鉄輪	18c末~19c初	瀬戸美濃	
13	I棟・検出面	I棟-011	磁器	菓子蓋	(9.0)	つまみ3.4	3.0	□:一部残、つまみ:1/2	白	竹文・二重圓縁、唐縁あり 内外:鉄輪、口縁流し扱ひ	透明	18c中	肥前	
14	I棟・検出面	I棟-012・土2 -002	陶器	壺	(9.2)	—	—	□:7/8、胴:欠	明灰	—	鉄輪・白輪	19c後半	不明	
15	I棟・検出面	I棟-011	磁器	皿	(12.7)	6.5	2.7	□:1/3、底:完	白	コバルト異焼、外周:唐草文、内面:松子花区間に草花文、口 縁部鉄口縁	透明	19c後半	瀬戸美濃	
16	I棟・検出面	I棟-012	磁器	皿	(9.2)	つまみ3.7	3.0	□:1/8、つまみ部:完	白	外周:草花文、内面:口縁端部四方文、天井部に方文 内面:灰白施釉、内面:天井部面転ヘラズリ、口縁端部コ ナデ	透明	19c前半	瀬戸美濃	
17	I棟・検出面	I棟-012	陶器	蓋	(7.6)	つまみ1.2	2.0	□:1/2、つまみ:完	乳白	—	灰輪	18c後半~19c前	瀬戸美濃	
18	I棟・検出面	I棟-013	磁器	鉢	(14.3)	6.5	3.5	□:1/8、底:1/16	淡黄白	内外周:鉄輪、底部筋動	鉄輪	18c後半~19c前	瀬戸美濃	
19	I棟・検出面	I棟-011	磁器	鉢	(11.8)	—	—	□:1/4、底:完	白	口縁内面に二重圓縁、外周文様(不明)	透明	18c後半	肥前	
20	I棟・検出面	I棟-012	磁器	鉢	(6.6)	3.7	6.2	□:1/4、底:1/2	白	コバルト異焼、高台外周二重圓縁、口縁内面四方文、外周火 箱文様文、唐縁あり	透明	19c後半	瀬戸美濃	
21	I棟・検出面	I棟-012	磁器	鉢	(8.5)	3.4	5.5	□:1/16、底:1/3	白	外周:草木文、内面:見込み部文様不明、二重圓縁 体部外面回転ヘラズリ、口縁の切り込み1箇所、外面裏割	透明	19c前半	肥前	
22	I棟・北東隅 包含層	I棟-G001- G004・G008	陶器	灯明受皿	(9.9)	3.6	1.9	□:3/4、底:完	乳白	—	灰輪	19c中	瀬戸美濃	
23	I棟・北東隅 包含層	I棟-008	陶器	急須	4.7	—	—	□:ほぼ完、底:欠	暗灰濁	—	鉄輪・灰輪	18c後半	方古	
24	I棟・検出面	I棟-013	陶器	灯明受皿	(9.7)	3.4	1.8	□:1/4、底1/8	乳白	定口と体部底面部に3箇所穿孔	内輪	19c	瀬戸美濃	
25	I棟・検出面	I棟-013	磁器	皿	(9.4)	4.8	2.2	□:1/3、底:1/2	白	外周:草花文、内面:輪花・口縁草文、見込み部:魚文	透明	19c	瀬戸美濃	
26	I棟・検出面	I棟-011・012	陶器	湯瓶	—	9.4	—	□:欠、底:ほぼ完	乳白	外周唐縁、内面筋動	鉄輪	18c後半	瀬戸美濃	
27	I棟・北東隅 包含層	I棟-013	陶器	鉢	(9.0)	—	—	□:1/6、底:完	乳白	内面唐杖、口縁コナデ、外周ヘラズリ調整	鉄輪	18c後半~19c前半	瀬戸美濃	
28	I棟・北東隅 包含層	I棟-007	磁器	小碗	(6.4)	(3.1)	4.3	□:底:1/2	白	口縁成形、文様なし	透明	19c	瀬戸美濃	
29	I棟・検出面	I棟-012	磁器	小碗	(6.4)	—	—	□:1/3、底部:欠	白	外周:口縁部に書文	透明	18c前半	肥前	
30	I棟・検出面	I棟-012	磁器	養蚕箔口	(6.4)	4.1	5.2	□:1/24、底:完	白	外周:山水・人物・舟、底面に「大明年製」 外周一口縁内面筋動、体部内面中位に二重圓縁、見込み部に七 宝文	透明	18c後半	肥前	
31	I棟・検出面	I棟-012	磁器	碗	(10.4)	4.1	5.8	□:1/3、底:ほぼ完	白	—	透明・鉄輪	19c	瀬戸美濃	
32	I棟・検出面	I棟-012	陶器	煎茶碗	(8.6)	—	—	□:1/8、底:欠	灰	高台部から口縁近くまで同軸施文具で施文、口縁~内面鉄輪(唐 黒)筋動、文様面所へ台方うす鉄輪	鉄輪・鉄輪	18c~19c	瀬戸美濃	
33	I棟・検出面	I棟-011	磁器	急須の蓋	(15.8)	—	1.9	□:1/2	乳白	口縁成形、裏面手拍子スリ、端部コナデ	鉄輪・鉄輪	19c	瀬戸美濃	
34	I棟・検出面	I棟-012	磁器	高皿	(7.5)	4.3	2.4	完形	白	車内成形、内面:唐草文・花文、	透明	19c後半	瀬戸美濃	
35	I棟・検出面	I棟-012	磁器	鉢	(7.6)	—	—	□:1/5、底:欠	白	外周:朝顔文、内面:口縁部四方 コバルト異焼、外周流水・草文	透明	18c後半~19c前半	肥前	
36	I棟・検出面	I棟-011	磁器	鉢	(17.8)	—	—	□:1/4、底:欠	白	外周:唐草文、外周流水・草文	透明	19c後半	瀬戸美濃	
37	I棟・検出面	I棟-012	磁器	鉢	(8.9)	—	—	□:1/4、底:欠	白	外周:唐草文、その他文様不明、内面:口縁部草花文、口縁 部部状口縁、口縁端部口縁	透明	18c後半~19c前半	肥前	
38	I棟・検出面	I棟-012	陶器	皿	(6.9)	3.0	1.8	□:2/5、底:完	黄白	口縁端部~内面筋動、体部~底面回転ヘラズリ調整	灰輪	19c	瀬戸美濃	

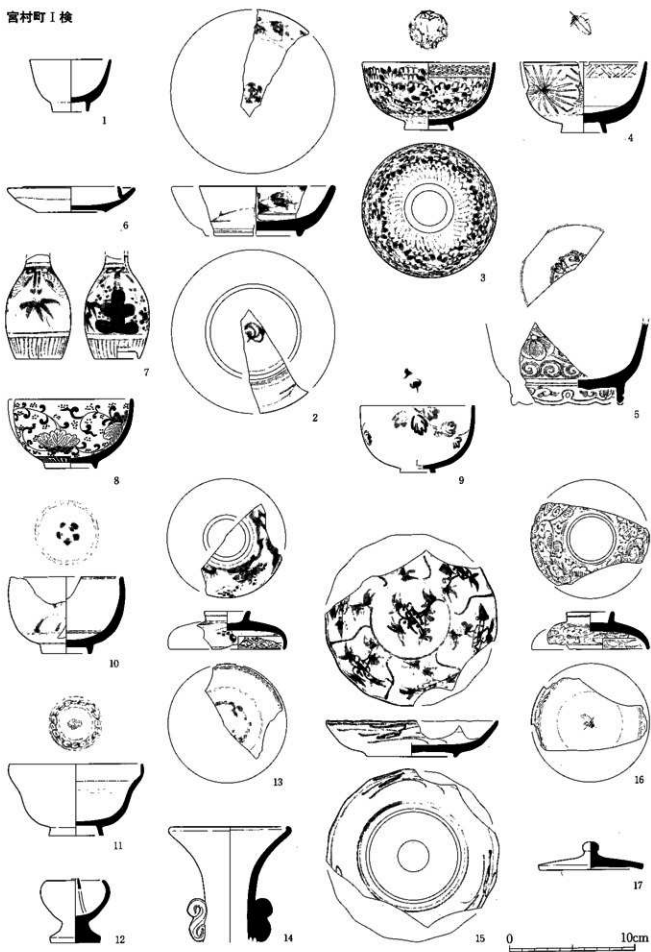
図No 別冊付	出土地点	注記	器種	器形	法量 (cm)			残存度	胎土	技法・文様・形態の特徴	釉調	推定年代	推定地域
					口径	底径	高さ						
81	II 棟・検出面	II 棟-011	陶師	碗	-	(2.4)	-	底: 1/2	淡灰～黄白	高台部露胎、外壁: 草文 (銅緑釉・鉄釉・赤釉)	銅緑・鉄釉・赤釉	18c後半	京・信濃
82	II 棟・検出面	II 棟-011	陶師	筒形壺	(5.1)	-	-	口: 1/5、底: 欠	淡黄白	外面: 草文 (銅緑釉)	灰・銅緑釉	18c後半	京・信濃
83	II 棟・検出面	II 棟-011	陶師	碗	(8.9)	-	-	口: 1/24	淡灰白	口ロコ成形、草文は銅緑釉	灰・銅緑釉	18c～19c	京・信濃
84	II 棟・検出面	II 棟-011	陶師	小皿	(5.6)	2.9	3.0	口: 5/8、底: 欠	乳白	外面: 腹部～底部回転ヘラケズリ露胎、削り出し高台	鉄釉	18c	瀬戸美濃
85	II 棟・検出面	II 棟-011	土器	皿	(7.6)	(5.6)	1.8	口: 底: 1/2	褐～褐色	口ロコ成形、回転糸切裏、一部は被熱痕・煤付着あり	-	19c	在地系
86	II 棟・検出面	II 棟-011	土器	皿	(8.9)	(6.4)	1.9	口: 底: 1/8	褐～褐色	口ロナダ成形、底部回転糸切	-	18～18c	在地系
87	II 棟・検出面	II 棟-009	土器	皿	(9.3)	5.4	2.2	口: 底: 1/12	褐～褐色	口ロナダ成形、底部回転糸切	-	18～19c	在地系
88	II 棟・検出面	II 棟-009	陶師	碗	-	3.7	-	口: 欠、底: 露胎	乳白～灰白	底部削り出し高台、高台部露胎	鉄釉	18c後半	瀬戸美濃
89	II 棟・検出面	II 棟-011	陶師	碗	(9.4)	(4.4)	2.2	口: 1/8、底: 一部のみ	陶化色	口ロコ成形、体部外面下平～底部回転ヘラケズリ	鉄釉	18c後半～19c	京・信濃
90	II 棟・検出面	II 棟-009	陶師	神楽鉢透孔	1.2	2.2	3.9	完形	乳白	口ロナダ成形、底部回転糸切	鉄釉	18c後半～19c	瀬戸美濃
91	II 棟・検出面	II 棟-009	陶師	神楽鉢透孔	-	2.0	-	口: 欠、底: 完	乳白	口ロナダ成形、底部回転糸切	鉄釉	18c後半～19c	瀬戸美濃
92	II 棟・検出面	II 棟-011	陶師	鉢花風か	-	(5.9)	-	口: 欠、底: 一部欠	灰白	口ロナダ成形、回転糸切	鉄釉	18c後半～19c	瀬戸美濃
93	II 棟・検出面	II 棟-009	陶師	鉢	(21.4)	-	-	口: 1/4、底: 欠	灰白	口ロナダ成形、口縁ヨコナダ、体部回転ヘラケズリ、No.57と	鉄釉	19c	京・信濃
94	II 棟・検出面	II 棟-015	陶師	碗	(8.7)	4.7	7.2	口: 1/24、底: 欠	乳白	全面露胎、高台部のみ露胎	鉄釉	18c後半～19c	瀬戸美濃
95	II 棟土4	II 棟-003	土器	皿	(8.5)	(5.5)	2.3	口: 1/6、底: 1/8	褐～褐色	口ロコ成形、底縁の転糸切	-	18c～19c	在地系
96	II 棟土1	II 棟-001	土器	皿	(10.8)	(7.0)	2.6	口: 1/6、底: 一部	褐～褐色	口ロコ成形	-	不明	在地系

* 実測番号と掲載番号は同一番号である。

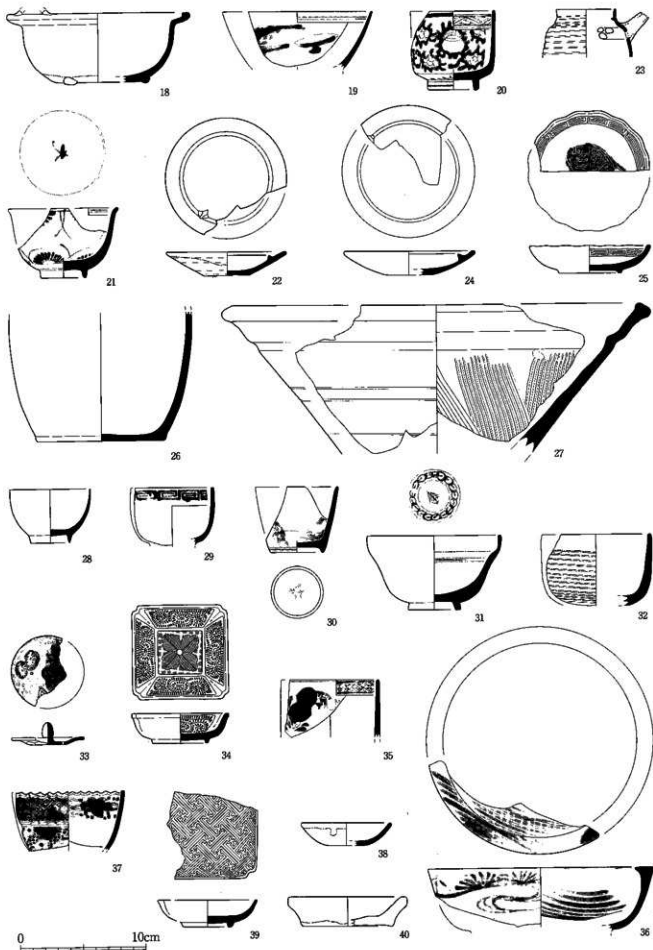
第3表 天神西2次土器観察表

図No	実測番号	出土地点	注記	器種	器形	法量 (cm)			残存度	胎土	色調	焼成	調査
						口径	底径	高さ					
97	天神1	1住	テ2、1住-004 テ2、1住-004、	壺	13.5	-	-	口1/4、底欠	長石・石英少量混入	内: 灰褐、外: 暗褐	良好	内: 工具ナダ (頸部は強いナダでケズリ状)、損傷箇所、外: 斜ハケメ (工具ナダ状の強いハケメ)	
98	天神2	1住	007	壺	16.8	-	-	口1/4、底欠	長石・石英・小石混入	内: 灰褐、外: 褐	良好	内: 口縁ヨコハケメ・頸部～胴部工具ナダ・指輪状痕、外: 頸部タテハケメ・胴部ヨコハケメ、胴部外面に炭化物・煤付着	
99	天神3	1住	テ2、1住-004 テ2、1住-001、	壺	15.0	-	-	口1/16、底欠	石英・小石混入	内: 灰・黄褐色	良好	内: 頸部ナダ・指輪状痕、外: ナダ、口縁部ヨコナダ 内: 口縁ヨコナダ、外: 口縁部外面指輪状痕、頸部ナダメハケ	
100	天神4	1住	005	壺	18.0	-	-	口1/6、底欠	石英・長石・褐色小粒混入	内: 濃赤褐、外: 暗褐色	良	内: 口縁部厚ヨコナダ、外面: 磨滅ハケメ	
101	天神5	1住	テ2、1住-002	壺	17.0	-	-	口1/8、底欠	石英・小石多量混入	内: 黄褐、外: 灰褐	良	内: ヨコ方向ナダ、外: タテハケメ (一部ヨコハケメ)、胴部端ヨコナダ	
102	天神6	1住	テ2、1住-002	高杯か	-	11.2	-	口欠、底1/8	石英・長石・小石混入	内: 外: 黄褐	良好	内: ナダ一部ハケメ、外: 縦方向の長いミガキ、客部中心に3単位貫孔 (焼成前穿孔)	
103	天神7	1住	テ2、1住-003	小型器台	-	11.9	-	口欠、底1/16	石英・小石混入	内: 外: 暗褐	良	内: ナダ一部ハケメ、外: 縦方向の長いミガキ、客部中心に3単位貫孔 (焼成前穿孔)	
104	天神8	1住	テ2、1住-004	壺	-	3.7	-	口欠、底1/2	小石多量混入	内: 灰赤、外: 赤	やや良	内: 弱い板ナダ、外: 一部ヨコミガキ (磨滅しやすい)	
105	天神9	1住	テ2、1住-004 テ2、1住004、	小型器台	(10.1)	-	-	口1/2、底部欠	砂粒・石英混入	内: 黄褐、外: 赤褐～褐色	良好	内: ナダ、口縁部端ヨコナダ、外: ケズリあり	
106	天神10	1住	007	鉢	(18.4)	-	-	口1/8、底欠	細砂粒・石英混入	内: 暗褐～褐、外: 暗褐	良好	内: ヨコハケメ、外: タテハケメ、口縁部端ヨコナダ	
107	天神11	1住	テ2、1住004	壺	-	(5.0)	-	口欠、底1/4	細砂粒・砂粒・石英混入	内: 暗褐、外: 灰褐～暗褐	良好	内: 工具ナダ、外: ヨコハケメ	
108	天神12	1住	テ2、1住004	壺	-	(6.0)	-	口欠、底3/4	細砂粒・砂粒・石英混入	内: 黄褐、外: 黄褐	良好	内: 工具ナダ、外: タテハケメ	
109	天神13	土2	テ2、土2-013	高杯	(17.3)	-	-	口1/5、底欠	細砂粒・砂粒混入	内: 黄褐、外: 黄褐	良好	内: タテミガキ、外: ヨコミガキ、口縁部端ヨコナダ	
110	天神14	土2	テ2、土2-014	高杯	-	(12.8)	-	口欠、底1/6	細砂粒・石英混入	内: 黄褐、外: 黄褐	良好	内: タテハケメと工具ナダ、外: タテハケメ、胴部に径0.7cmの透かし3単位	
111	天神15	P10	テ2、P10-012	壺or鉢	(12.4)	-	-	口1/10、底欠	細砂粒・石英混入	内: 灰褐、外: 褐～黒褐	良好	内: ヨコハケメ、外: 磨滅不明、口縁部端ヨコナダ	
112	天神16	検出面	ミヤ2-II 棟検009	壺	-	6.0	-	口欠、底欠	長石・石英・細砂・粗砂混入	内: 灰褐色、外: 褐～褐色	良好	内: 磨滅不明、外: タテハケメ	
113	天神17	検出面	ミヤ2-II 棟検010	壺	(18.6)	-	-	口1/8、底欠	石英・細砂～粗砂混入	内: 外: 黄褐	良好	内: 口縁部端ナダ方向ミガキ、口縁下平ヨコナダミガキ、外: 口縁部端欠ハケメ、口縁下平ナダ方向ミガキ	

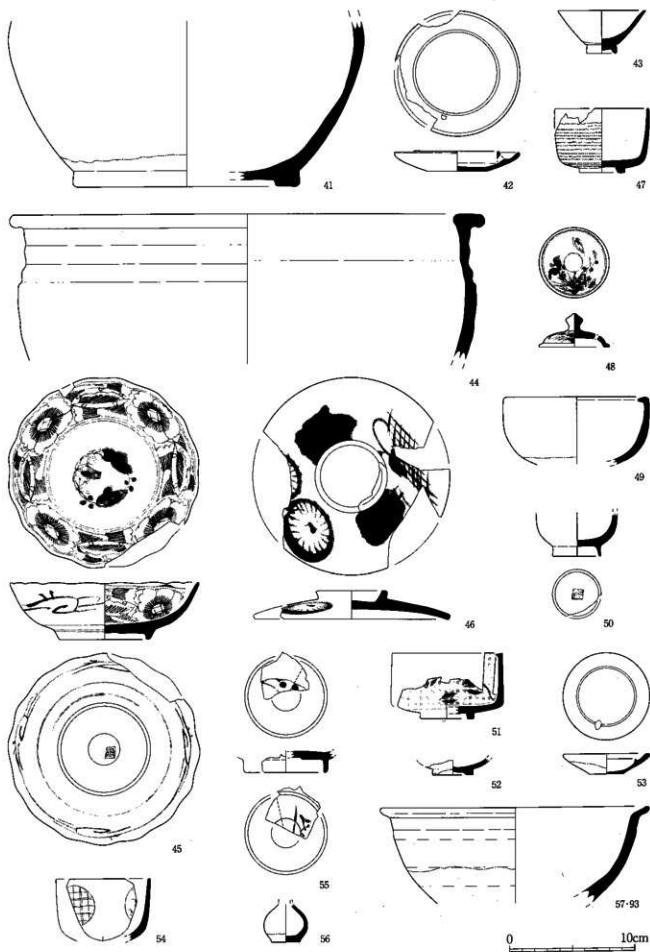
宮村町 I 検



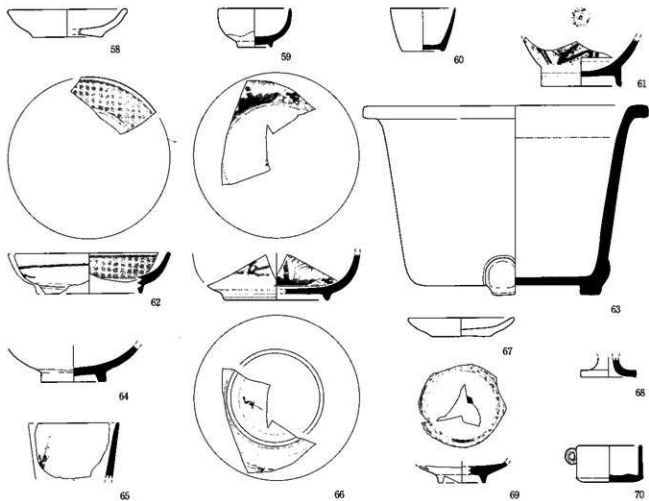
第10図 宮村町土器・陶磁器(1)



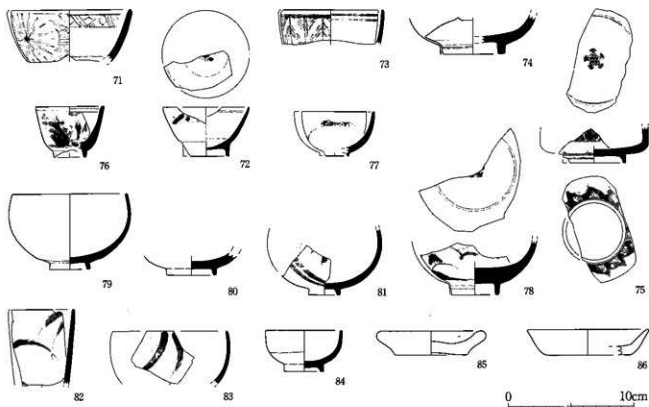
第11圖 官村町土器・陶磁器(2)



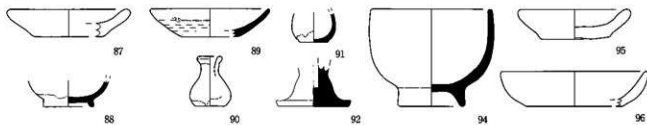
第12図 宮村町土器・陶磁器(3)



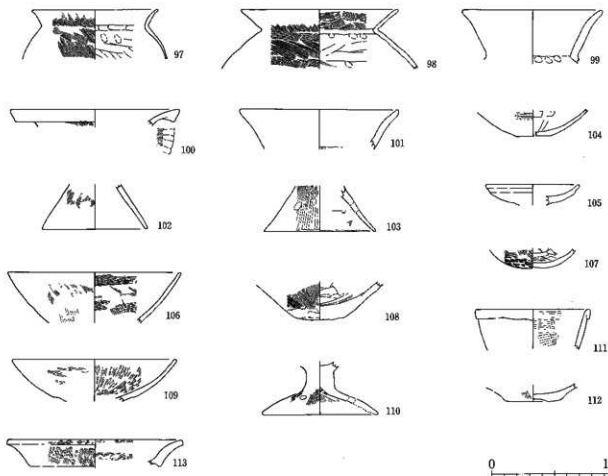
宮村町II換



第13图 宮村町土器・陶磁器(4)



天神西



第14図 宮村町土器・陶磁器(5)、天神西土器

3 木製品 (第4表、第15~17図)

(1) 出土木製品の概要

今回の調査では、31点の木製品が出土した。いずれも近世の宮村町第1検出面からの出土である。遺構からの出土は24点(第4図1~15・20~23)あるが、すべて廃棄土坑から見つかったものである。この他の7点は、遺物包含層である整地層から出土した。本報告書では、このうち図化可能な26点を掲載した。出土した木製品31点の種別は、漆器6点(16・17・26、ほかは図化不可分)、木製品25点(1~15・18~26、ほか図化不可分)である。図化提示資料26点の器種内訳は、曲物10点(円板5点・蓋3点・側板1点・柄杓1点)、下駄6点、その他10点(桶1点、栓1点、刷毛1点、笥1点、扇子2点、木簡1点、箱類1点、漆碗蓋1点、不明1点)である。以下、種別・器種別に概要を記述する。

(2) 漆器

16は、漆塗りの曲物円板である。片面のみ漆が塗られているもので、径15.7cm、厚さ0.8cmを測る。17は、箱類の部材である。表面は朱漆(下地黒漆)、裏面黒漆が塗られている。黒漆の面には、側板接合痕があり、竹釘が5箇所打たれているのが観察できる。26は、漆碗蓋である。外面は黒漆、内面は黒漆に朱漆が上塗りされている。外面側面から天井部にかけて金彩で蝶と沢瀉の文様が描かれている。

(3) 木製品

ア 曲物

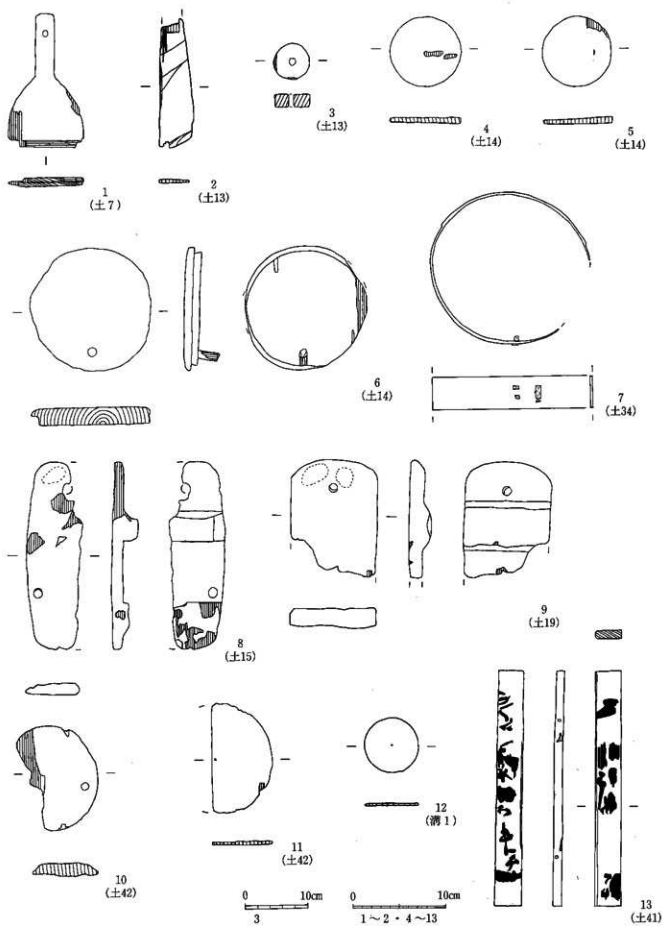
7は、曲物側板である。上・下部ともに欠損している。側面一部に、桜皮による縫い留めの痕跡が残っている。24は、柄が装着される柄杓である。底板は欠損しているが、柄を固定する留め具が桜皮によって縫い留められ、残存している。側板中央部の1箇所には、板を縫いとめた桜皮も残存している。6・10・19は、曲物蓋である。本体との噛み合わせ箇所が、段状に削られている。すべてのものに、栓が1箇所付けられている。

イ 下駄

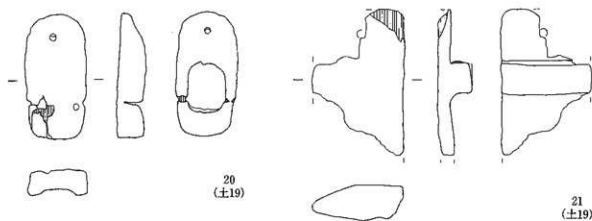
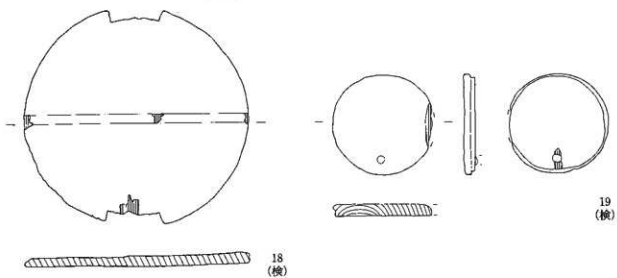
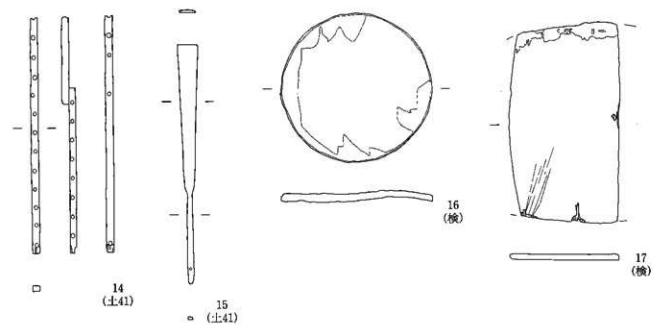
今回の調査では、連歯下駄3点(8・9・21)、差歯下駄1点(22)、刺り下駄2点(20・23)の3種類の下駄が出土した。20・23は刺り下駄である。裏面には4×5.3cmの袢りがある。長さ12~13cmと小型であるため、子供用のものか。22・23は、形状や規模が非常に類似しているため一対のもの可能性が高い。22は差歯下駄である。歯部は欠損しており、台部のみが出土した。台部断面形状は逆台形で、台裏には長方形の平坦面がある。8・9・21は、連歯下駄である。8・21は、歯が垂直に削り出されているものである。9は、前歯しか残存していないものであるが、歯の断面形状は傾斜があり逆台形状を呈する。

ウ その他

1は刷毛である。先端の毛質部分は欠損している。柄の先端には、径0.5~0.7cmの穴が穿たれている。2は笥である。笥部には工具痕が明瞭に残る。3は、径2.8cmの円板状を呈するもので、中心部に径0.4cmの穴があげられている。用途は不明である。13は墨書のある木簡である。表裏それぞれに墨書がみられる。表には「嘉永五壬子年[]」、裏面は[]で、年号以外の文字の判読は不可能である。15は扇子の側板である。下端部には径0.3cmの穴がみられる。15の出土した土41からは、図化できなかったが扇子の部材と考えられる細い棒状の木製品も出土している。18は、桶の蓋と考えられるものである。上面中央部には、幅0.9cmで把手が付けられていた痕跡が残る。端部2箇所には台形状の袢りが残る。25は栓である。截頭円錐形の形状で、側面に細かい工具痕が明瞭に残る。

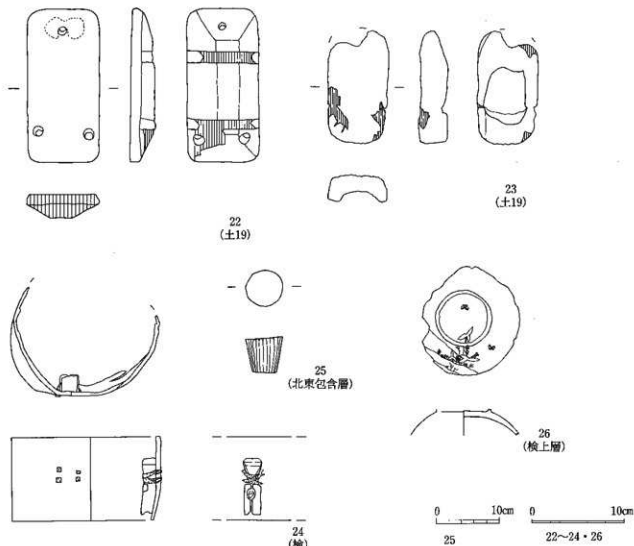


第15図 木製品(1)



0 10cm
14~21

第16図 木製品(2)



第17図 木製品(3)

第4表 木製品観察表

図号	検出層	遺構名	発掘層号	部材分類	平法	長さ・口径 (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	備考
1	I	土7	A-1-5	銅毛	板目	14.1	8.1	0.9	柄部に0.5×0.7cmの穴あり、先端部に2本の沈線あり
2	I	土13	A-1-11	釘	板目	(12.7)	3.5	0.3	工具柄部跡
3	I	土13	A-1-10	不明	板目	径2.8		0.9	中心部に径0.4cmの穴あり
4	I	土14	A-1-1	円板	板目	径7.5		0.7	表面とも中心に0.1cm以下の小孔あり
5	I	土14	A-1-3	円板	板目	径7.5		0.6	板皮で縫い留め1箇所
6	I	土14	A-1-2	曲物蓋	板目	径13.0		1.8	縁部が合わせ口に成形、杓あり
7	I	土34	A-1-7	曲物	板目	径17.1		0.4 (3.5)	板皮縫い留め
8	I	土15	A-1-4	下駄	板目	20.0	(5.6)	2.7	
9	I	土19	A-1-6	下駄	板目	(11.8)	(9.1)	2.3	連削下駄、横縫孔あり、1/2穴損
10	I	土42	A-1-35	曲物蓋	板目	径(11.2)		1.4	径1箇所あり、1/4穴
11	I	土42	A-1-36	円板	板目	径(11.6)		0.4	中心部に径0.3cmの穴あり、1/2穴損
12	I	溝1	A-1-38	円板	板目	径5.8		0.2	中心部に0.1cmの小孔あり
13	I	土41	A-1-33	穿孔木刺	板目	18.9	2.1	0.7	表面磨きあり、表：「基本五(五子カ)」、裏：「{ }」
14	I	土41	A-1-31	銅毛	不明	(13.1)		0.6 0.5	
15	I	土41	A-1-30	銅毛	板目	25.2	2.0	0.3	下削部に径0.3cmの穴1箇所あり
16	I	検	A-1-26	円板(漆塗)	板目	径15.7		0.8	片面漆塗り
17	I	検	A-1-41	銅網(漆塗)	板目	(21.0)	(11.6)	0.6	表面先塗(下地黒漆)・高周黒漆、裏面に鋼板接合、竹釘5箇所
18	I	検	A-1-18	桶蓋	板目	径24.0		1.1	把手部欠損、端部2箇所台形状の切り込みあり
19	I	検	A-1-27	曲物蓋	板目	径10.6		1.2	径1箇所あり、合わせ口部段状成形
20	I	土19	A-1-24	下駄	板目	13.3	6.5	2.8	
21	I	土19	A-1-22	下駄	板目	(15.3)	(9.6)	3.7	連削下駄
22	I	土19	A-1-19	下駄	板目	16.5	7.7	(2.5)	連削下駄
23	I	土19	A-1-20	下駄	板目	(12.0)	6.4	2.8	
24	I	検	A-1-29	曲物柄杓	板目	径16.4		0.4	8.9 柄の留具板皮で縫い留め固定
25	I	北東包合層	A-1-39	桶	板目	径2.8		3.0	
26	I	検	A-1-42	桶蓋	板目				外周黒漆・内周朱漆、外周に金砂で紋線(線・沢瀉か)
-	I	土1	A-1-16	不明	板目	(11.7)	1.1	0.7	片面に径0.3cmの穴あり
-	I	土1	A-1-15	銅網(漆塗)	板目	20.0	(3.5)	0.6	全面漆塗り、1箇所には鋼板接合あり(竹釘4箇所)、一端は銅の加工
-	I	土25	A-1-25	不明(漆塗)	板目	9.1	6.9	0.3	表面が漆塗り、裏面に径0.3cmの穴4箇所あり、漆脱、砂目取加工
-	I	土25	A-1-28	銅網(漆塗)	板目	(24.0)	(3.2)	0.6	表面朱漆(下地黒漆)・高周黒漆、裏面に鋼板接合、漆脱
-	I	土19	A-1-23	下駄	板目	(8.5)	(5.9)	1.0	連削下駄

* 図表記載のないものは、遺存状況が判った図化表示していないものである。

4 金属器

金属製遺物群の概要

宮村遺跡第2次調査は、遺構検出層表面は明らかでないものの2面を調査され、出土した土器・陶磁器の型式から推定されたとみられる古墳時代、近世と推定された遺構が検出されているようである。金属製遺物は、いずれの調査面および遺構から回収された。総回収個体数は27点であり、検出面1では19点、検出面2では6点、包含層とされた検出面1と2の間に堆積したとみられる土層より回収された2点である。(第6表) 遺物は、通し番号を付し管理番号とした。また実測図作成基準は、三次元座標記録保持個体の1点および遺構所属個体のうち鏡以外の7点、計8点を対象とし提示した。

遺構所属個体のうちID03は、検出面1のSK25回収である。材質は銅とみられ、遺存した構造から同形素材を対称に結合したものとみられる。その結合技術は、半田付けによるものとみられる。また各素材収束部にも同様の技術が用いられているとみられる。その技術には注意を要するものとみられる。(第18図)

なお本調査地における共時的・通時的関係の検討は、援用すべき他の遺物においても不明な点も多く、断念せざるを得なかった。

引用・参考文献

- 内堀 団 2003「金属器」[平田本郷遺跡4・5] 松本市教育委員会 pp69～pp61
 太田圭郎 2003「石器」[平田本郷遺跡4・5] 松本市教育委員会 pp62～pp85
 内堀 団・太田圭郎 2003「五輪遺跡」松本市教育委員会

第5表 主要諸元

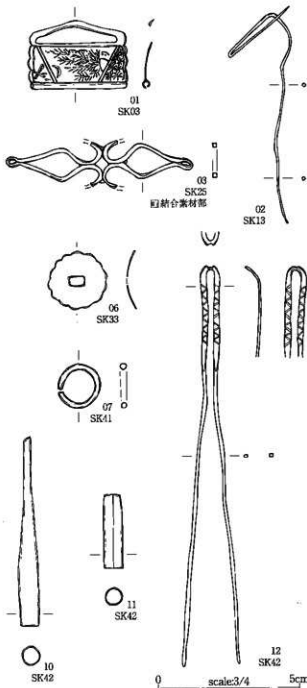
項目	数値	凡例				
検出層別個体数	27	収束部 (g)	937	遺構番号	番号	
単面平均 (%)	100.0%	重量係数	27	SK	土坑状遺構	不明
検出面 (%)	92.6%	検出回数	6	TG	グリット	観測時
平均検出層別個体数	0	結合材料数	0	TK	検出層	G 金
三次元座標記録層 (%)	3.7%	三次元座標記録層個体数	1			G 金
埋蔵層別個体数 (%)	0.0%	埋蔵層別個体数	0	金属種別	番号	
埋蔵層別個体数 (%)	29.1%	埋蔵層別個体数	13	Al	アルミニウム	銅製物
文書番号 (%)	0.0%	文書番号個体数	0	Cu	銅	
実測番号 (%)	26.6%	実測番号個体数	8	Fe	鉄	
実測番号 (%)	100.0%	実測番号個体数	27	Al	アルミニウム	銅製物

第6表 検出面・出土遺構単位推定器種

検出面	出土遺構	実測遺構	検出面	遺構	不明	前	後	遺構単位	g
1	SK00							1	3.5
	SK13							1	0.6
	SK25	2						3	11.6
	SK26							1	1.8
	SK41							1	0.0
	SK42	2		1	2			5	12.4
検出面	TG	1	1	2	1			2	16.7
	TK					1	1	2	26.8
	SK1	1						1	2.7
	SK2							4	1.3
総計		5	4	3	7	1	1	4	27

第7表 金属製遺物一覧

ID	検出面	遺構	実測	番号	X座標	Y座標	Z座標	3D	金属種別	重量 (g)	最大長 (mm)	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	厚/径比	形状	天部	刃部	状態	注記
01	SK00	SK00	1	SK00	15566	Q139	110	O	Cu	35	347	34	2.6	1.4	6.2	19	板状	G	不明
02	SK1	SK1	1	SK1				X	Cu	6	72.6	0.8	0.8	0.8	1.3	91.1	棒状	G	不明
03	SK25	S	UK	SK25				X	Cu	34	96.1	17	2.2	3.9	77	4.8	板状	G	不明
04	SK25	S	UK	SK25				X	Cu	29	26.1	3.8	1.1	1	26.5	1.5	板状	G	不明
05	SK25	S	UK	SK25				X	Cu	4.3	27.3	1.3	1.3	1	28	1.2	板状	G	不明
06	SK25	N	UK	SK25				X	Cu	1.8	30.5	20.1	2.7	1	74	1.7	板状	G	不明
07	SK41		UK	SK41				X	Cu	0.6	15	14.9	1.8	1	8.3	1.8	板状	G	不明
08	SK42	E	UK	SK42				X	Cu	35	24.3	24.3	1.2	1	20.3	1.59	板状	G	不明
09	SK42	E	UK	SK42				X	Al	0.8	32.5	12.4	4.4	1.5	28	1.28	板状	G	不明
10	SK42	E	UK	SK42				X	Cu	2.8	96.7	8.6	8.4	7.8	1	8.1	棒状	G	不明
11	SK42	E	UK	SK42				X	Cu	2.4	26.2	8.1	8	3.2	1	3.1	棒状	G	不明
12	SK42	E	UK	SK42				X	Al	3.5	136.8	5.7	0.8	24	71	24.7	棒状	G	不明
13	TG	NSLW15	埋蔵層	TK				X	Fe	17	140	30	3	2	23.3	2.27	板状	G	不明
14	TK	NSLW15	埋蔵層	TK				X	Fe	17	140	30	3	2	23.3	2.27	板状	G	不明
15	TK		UK	TK				X	Cu	2.2	54.5	4	2.9	1.6	14.1	棒状	G	不明	
16	TK		UK	TK				X	Cu	2.7	178	3.5	1.1	50.9	3.2	51.3	棒状	G	不明
17	TK		UK	TK				X	Cu	3.3	60	3.8	1.7	20.7	1.6	23.7	棒状	G	不明
18	TK		UK	TK				X	Fe	1.8	161.3	2.2	2	46	1.1	46.1	棒状	G	不明
19	TK		UK	TK				X	Cu	5.4	82.9	60.2	0.2	1	30.1	1.30	板状	G	不明
20	TK		UK	TK				X	Cu	1.7	154	14.9	8.9	1	17	3.2	棒状	G	不明
21	TK		UK	TK				X	Cu	1.6	224	22.4	0.8	1	22	1.28	板状	G	不明
22	TK		UK	TK				X	Cu	2.7	23	22.9	4	1	24.1	1.33	板状	G	不明
23	TK		UK	TK				X	Cu	4.5	65.8	15.4	7	2.6	2.5	3	棒状	G	不明
24	TK		UK	TK				X	Cu	2.2	162	16.3	11.1	1	15	1.1	棒状	G	不明
25	TK		UK	TK				X	Cu	3.5	43.9	9.8	9.6	4.5	1	4.1	棒状	G	不明
26	TK		UK	TK				X	Cu	1.3	25.2	16.9	1.6	1	10.6	1.1	棒状	G	不明
27	TK		UK	TK				X	Fe	0.5	24.9	4	3.7	6.2	1.1	6.1	棒状	G	不明



第18図 金属器実測図

1: 宮村I 検全景

2: I 検土19



3: 宮村II 検全景

4: 天神西全景



5: 天神西 1 住

6: 陶磁器No.3



7: 陶磁器No.9

8: 陶磁器No.45



9: 陶磁器No.53

10: 陶磁器No.70



長野県松本市 松本城下町跡宮村町第2次・天神西遺跡第2次 緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし まつもとじょうかまちあとみやむらまち てんじんにしいせき きんきゅうはつくつちょうさきょうこくしょ							
書名	長野県松本市 松本城下町跡宮村町第2次・天神西遺跡第2次 緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No179							
編者名	竹内増長、直井雅尚、菊池直哉、内郷 団							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号 TEL 0263-34-3000内 (記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2005(平成17)年3月25日(平成16年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
松本城下町跡 宮村町・天神西	長野県松本市 深志3丁目7-47	20202	157 495	36° 13' 37"	137° 58' 32"	20040301～ 20040330	88.3㎡ (3面調査： 総計257.4㎡)	民間共同住宅建設に 伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
松本城下町跡 宮村町 天神西	城館跡 (城下町・武家屋敷) 集落址	近世 古墳		住居址1・土坑73・ ピット26・溝8		土器・陶磁器、金属製品、 木製品、石製品		上層は、近世の城下町跡宮 村町の武家屋敷地の調査で ある。敷地奥側の廃棄土坑 群を検出し、多様・多様な 出土遺物が出土した。下層 は、古墳時代前期の天神西 遺跡の調査である。低湿地 に隣接した台地上に形成さ れた集落址である。

松本市文化財調査報告 No179

長野県松本市

松本城下町跡 宮村町 第2次

天神西遺跡 第2次

— 緊急発掘調査報告書 —

発行日 平成17年3月25日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 藤原印刷株式会社